秘密結社の日常的侵略行為

山咲 祐継

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秘密結社の日常的侵略行為

【Ｎコード】
Ｎ５６６９Ｘ

【作者名】
山咲　祐継

【あらすじ】
初めてです。よろしくお願いします。

あらすじ

なんでもないただの独身男が事故った結果、改造人間になっちゃったっていう・・・

そんな話です。

過程が気になる方はどうぞ見てって下さい。

出来れば気にならない方も一回くらい見ていって下さい。

1『テンションに身を任せると・・・死にます』（前書き）

初めての投稿です。

感想をいただけたらとても嬉しいです。

それではどうぞ、行ってらっしゃいませ。

1『テンションに身を任せると・・・死にます』

目に映る物がそれなりの速さで背後へと流れていく

高校時代に買ってから5年、大事に乗ってきたスクーターで山道を疾走する

3年前に出た田舎に帰るためだ

理由は不況の煽りをくらった、とだけ言っときます

都会で感じることの多かった、閉鎖的な感覚から解放されたような感慨を感じる

だからだろうか

時々見かける速度規制の看板を無視してしまったのは

スピードを上げるごとに、ストレスが発散される気がして気持ちがいい

辺りは田舎特有の自然豊かな山々が見える

だんだんと気が大きくなり始めたころ、山道のカーブに差し掛かった

しかし、スピードは落とさない

いけると思ったんだ、だから逆にスピードを上げた

「ヒーハー！！　イニシャルD…スクーター版だあぁぁ！！」

ここで一つタネ明かしでもしましょう

俺は案外バカ野郎です

どれくらいかって？

「ウギャアァァァ！？　調子乗りすぎたぁぁぁ！！　俺の大バカ野郎オォォォ！！」

飛ばしすぎてガードレールから飛び出すくらいには・・・

現在、山道の急カーブを曲がりきれず相棒（中古スクーター…ローン有り）と共に落下中

眼下には鬱蒼とした森林が迫ってる・・・

「ヤバイね！　こりゃまじでヤバイ！！
人生生きてきたなかで一番ヤバイよ！？
いやもうヤバイなんてもんじゃなくヤヴァッ……！！」

着地に・・・

見えなくもないと思え

着地？　の拍子にバキゴキッとしたイヤ～な音がした
多分折れたんだろう、いろいろと
不思議と痛みが無い代わりに体が動かない

「…う……ガッハ！？」

声を出そうとしたら咳き込んでしまった
けっこう重傷っぽい、血も出てるし
骨が肺にでも刺さってんのかもしんない
マズイな…早いとこ病院に行かないと死ぬかも

「……っが！　…ゲホ！」

助けを呼ぶ為、声出しに再度チャレンジ

しかし、咳き込むだけで声は出ず

あ～、だんだん頭がぼーっとしてきた

つか今更ながら、此処って山の中だし人通り少ない田舎じゃん

声出せても人に届く確率が絶望的なの忘れてた

もうまともに頭も働かないみたいだ

視界の端にチラチラみえるガラクタ・・・元相棒（元中古スクーター）の姿が絶望に悲愴感をプラスする

「ゲホ！　ゴホッゴポッ！？」

咳きと共に大量の吐血

本格的にヤバイ

目が霞んできやがった

体が氷みたいに冷たい

自然と一つの可能性が、頭の中をよぎる

『死ぬ』・・・・？

普段、考える事さえ無い単語が徐々に現実味をおびる

死ぬのか？　ここで・・・・

俺が？

本当に・・・・

こんな所で？

死にたくねぇ・・・・

死にたくねぇよ

やりたい事たくさん有るんだよ

まだ初体験どころかキスさえしたことないだ！！

彼女が出来た事さえないんだぞ！？

嫌だ・・・

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だイヤだイヤだイヤだイヤだ死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくないシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイ・・・！！

・・・ま・・・だ

「じに〝だ…ぐな〝…い〝！！」

俺の魂の叫びとも言える声に反応するように

ガサッ・・・

！？

自分に近づく音が聞こえた

視界がほぼ完全に暗くなりかけているせいで、そちらを確認する

ことは出来ない

ガサッ・・・

人なのか熊なのか・・・

そこまで考えたところで俺の意識は完全に途切れた・・・

1『テンションに身を任せると・・・死にます』（後書き）

お帰りなさいませ。

ここまで読んでもらえただけで嬉しいのですが・・・

出来れば感想が欲しいです。

どうかよろしくお願いします。

2『生きていたみたいです』（前書き）

2話目です。

よろしくお願いします。

2『生きていたみたいです』

「……ぅん、むぅ……まぶしっ」

顔に当たる強い光で目が覚めた俺

いつの間にか寝ちまってたみたいだな

あ〜、随分寝てたみたいな気がする

「んっ…」

おかしいな

首が動かん

つーか、指先の感覚さえ無いぞ

つまり全体的に体が動かないんですけど

「こーゆうのは……まさか」

か・・・金縛りとか？

イヤイヤイヤ無い無い無い無い絶対無いね

そんなんアレだもん、非科学的ってヤツですもん

何か言葉づかいがおかしい気もするが・・・

とっとにかく！　あり得ないから

はい！　この話はもう終わり！！

冷静に、落ち着いて・・・

しっ深呼吸して

スーハースーハー・・・ゲホッゴホッ

若干・・・というか、

かなりびびりな俺です

～1分後～

大分落ち着いたぜ

少し動いてみるか

と言っても動くのは・・・

どうやら、目と口だけのようだ

仕方ないので動く目を最大限に活用する

唯一の情報源によって得られた情報から推測する

しばし黙考

・・・

これ・・・手術台じゃね？

まだ夢の中ってか？

・・・

つーか、どっかで見た事あんぞ

これは・・・

！

「…まさか……ショッ〇ー？」

いや、…デスト〇ンか？

などとシリアスな風を装って馬鹿な事を考えている俺

仮〇ライダーはブラックとクウガが好きだった

「最近のライダーはウケ狙い過ぎてあまり『やっっと目覚めたか！！！！』」

！？

突如響いた大声量に、びびりな俺は当然びびる

だが、謎の金縛りのおかげで、俺がびびりなのはばれてないはずだ

普通ならビクッとして手術台から転げ落ちたあげく、テーブルの下までスライディングする勢いであろう

謎の金縛りグッジョブ！！

ショッ〇ーのくだりとか、聞こえてないともっと嬉しいんだが・・・

・

「博士、いきなり叫ばないで下さい。

……それと我々はシ〇ッカーではありません」

？

次に響いたのはさっきとは違う、落ち着いた感じの女性の声・・・

どうやら死角に居たらしい

全く気付かなかった

しかも、ショッ〇ーのくだりはばっちり聞こえてたみたいです

死にたくなってきた・・・

・・・死？

あっ！？

思い出した！！

なんで！？？

「俺生きてる」

2『生きていたみたいです』（後書き）

感想をいただけたら嬉しいです。

次話も出来るだけ早く投稿できるよう頑張ります。

それでは。

3『あれ？　俺ってこんなに口数少なかったかな・・・』（前書き）

3話目です

とりあえず言い訳をさせて下さい

忙しかったので投稿遅れました！

本っ当にすみませんでした！

違うんです！　あのテストのヤツが本当に面倒臭くって！

以後気をつけますんで許して欲しいです！

それではどうぞ！

あっ　間違いなどございましたら指摘して頂くとありがたいです

なにぶんまだこのサイトを使いこなせていないので

ではでは

3『あれ？　俺ってこんなに口数少なかったかな・・・』

「俺生きてる」

おかしいな

ペンギンの帽子かぶったり
生存戦略〜！　って叫んだりした記憶はないんだが

あれ・・・

つまり俺

死んでないんじゃね？

「ってことは……
助かった……？」

完全に死んだと思ってました

独り言がついつい漏れてしまうほど唖然としていると

「当然だよ！！」

という

やたら元気な返事が返ってきた

先ほど俺をびびらせた大声量と同じ声だ

不覚にもまたびびってしまった

「完成ですね」

そんな言葉と共に手術台に寝かされてる俺には見えない位置から

二人の人影が出てきた

人影をよっっく観察した結果二人とも女性のようだ

おそらく先ほどの声の主達だろう

明らかに丈の長すぎる

大きめの白衣に腕を通した活発そうな少女と

漆黒のスーツをかっこよく着こなした秘書っぽい大人の女性だった

「～♪」

白衣の少女は中学生くらいだと思うが
茶髪をツインテールにしてるせいでかなり幼く見える

そしてこちらは

「……」

肩口で切り揃えられた黒髪の
知的な雰囲気が漂うザ・秘書ってカンジの人なんだが・・・

「……何か？」　・・・

何だろう・・・スゲー恐い

びびり君センサーがビンビンに反応してるし

何より視線に寒気を感じる

超恐い

やっぱりアレか？

じろじろ見てたのが気にくわなかったってことか？

「いやあの……あ　あまりに綺麗だったんで　つい……」

とりあえず謝りながら
ご機嫌をとる

だからそんな目で睨まないで下さい

お願いしますから

いい加減ヤバイんですよ

主に俺の涙腺が決壊的な意味で

くっ　限界が・・・近い！

などと秘書っぽい人と無言の攻防？　（俺の中だけ）をやっていると

「ふっふっふっ　なるほど……」

何故か突然笑いだした白衣の少女

どうした

電波でも受信したか？

このタイミングで厨二発症か？

「博士？」

心なしか秘書っぽい人も心配したような声を出す

「なるほどな……」

まるで深く納得したかのような声で

白衣の少女が小さく呟いた

その口は怪しげに笑っている

何が『なるほど』なんだ？

「私のこの美貌に魅せられたのだな！！」

瞬間　白衣の少女が吠えた

・・・

どうやら俺のお世辞に反応したらしい

お前に言ってねぇって

なんというか・・・

この娘アホっぽい

「……」　秘書っぽい人もどこか諦めたような表情してるし

あっ　目が合った

いつもこんな感じなのだろか

疲れた顔をしていらっしゃるので

とりあえず大変ですねぇという意味の視線を送ってみる

「チッ

……問題は無いようですね」　舌打ちが返ってきた

余計なお世話だ的なカンジかな・・・

もしかしなくても俺嫌われてる？

「畏縮するのも無理はない！　私の美しさはもはや兵器のレベルだからな！」

・・・何か変なスイッチが入ったらしい

自信に満ちた笑顔で延々と自分を誉め称えている

この娘はアホの子かもしれないな

・・・マジで止まんない

お～い帰ってこ～い！

ぜんっぜん話が進んでねぇ気がする・・・

3『あれ？　俺ってこんなに口数少なかったかな・・・』（後書き）

セリフって難しいですよね

いろいろ修正してたら主人公のセリフが少なくなってて驚きました

キャラの性格も大幅に変わったり

まだまだ素人以下の自分ですが頑張っていきますんで

応援お願いします！

それでは！

4『それでも俺は人間です』（前書き）

４話目投稿します

基本的に不定期更新になります（，・ω・、）

何かいろいろとすみません！
慣れるまでもう少しお待ち下さい

まったりいきましょう！

それではどうぞ

4『それでも俺は人間です』

あれから1分くらいの時間が流れましたが

話が進まないです

何故かと言うと・・・

『完璧過ぎる私のうんたらかんたら……

そもそも私の美しさはどうたらこうたら……

宇宙の神秘があぶらかたぶら……』

白衣の少女に全く止まる気配が無いです

ていうか宇宙の神秘って

・・・

いやいや　違くて

今そんなん気にしてる場合じゃないじゃん

今一番気にしなくちゃならんのは

「ここどこ　なんで生きてんの？　俺」

これよ

俺的にこれが一番気になる所

「こいつはいったいどういう……」

思わず口から出た疑問だったが

意外にも答えてくれる方がいらっしゃったようです

答えが返ってくるとは思っていなかったから独り言のつもりだったんだが

意外っちゃ意外　秘書っぽい人だった

「……研究に都合のいい“物”が落ちていたので拾っただけです

……勘違いしないでください」

はいツンデレ乙って思った良い子の皆〜！

絶対勘違いしちゃダメですよ〜！

この人の目は本っ当に俺の事を“物”としか見てないからね〜！！

・・・悲しいけどこれって現実なのよね

あれ　室内なのに雨が降ってやがる

ハハッ　この雨　しょっぺえや

とまぁ・・・ふざけるのはこれくらいにして
秘書っぽい人は研究とかなんとか言ってたが
恐らくただのジョーク的なものだろう
限りなくブラックに近い類の
つまり彼女達に助けられたということでいいのだろうか
俺が森に倒れている所を彼女たちが見つけ
←
保護
←
手当て　の流れかな
なるほどそれなら説明がつく気がする
さっきまでの冷たい態度はただの口下手　それか照れ屋さん
そうだ

そうに違いない！　と思いたい

俺は

なんだ結局はいい人達じゃね？　説

を信じるぜ！！

だとしたら礼を言わねばなるまいな

しかし　何故体が動かんのか

もしかしたら麻酔でもかけたのかもしれんな

などと考えていると・・・

「体が動かないのは　まだ機械化に馴染んでないからです」

と秘書っぽい人がおっしゃっられた

・・・？　きかいか？　キカイカ？

あっ　機械化？

ふっ　何を言い出すかと思えば・・・

あんたも不治の病(ちゅーにびょう)の人か・・・

「お嬢ちゃん　大人をからかうのは良くないごめんなさいすみません許して下さい」

言った瞬間ものすごい形相で睨まれた

例えるならモンスターをハンターするゲームのティ〇レックスだ

超恐えぇ

「信じられないだろうな　ならば見るがいい　もはや私の作品となったその体を！」

さっきまでｈａ～　ｈａ！　ｈａ！　ｈａ！　って高笑いしてたのに

いつの間にか自己陶酔の世界から帰ってきたイタイ子がまた声高々に吠える

ほとんど空気と化していたな・・・

「ポチッとな」

少女がわざとらしく口に出しながら

何かリモコンのようなものを操作すると　自分の体の上にデカイ鏡がせりだしてくる

おかげで手術台に乗った自分の体が良く見える形だ

「マジか……」

思わずこぼれたこの一言が今の俺の気持ちをすべて物語っている

鏡に映った自分を凝視する

指先の感覚なんて無い筈だ

そこに見えるのは

手足の無い自分の姿

おまけに首から下は機械的な光沢を放っている

「ご自分のおかれた状況が判りましたか？」

秘書っぽい人が何か言ってるけど

ぜんぜん耳に入ってこない

放心中の俺

かろうじて口からもれたのは

「うそん……」　そんな現実逃避の一言でした

ていうかこれ

やっぱ〇ョッカーじゃん

4『それでも俺は人間です』（後書き）

キャラが私の手から離れて動きます！

全く言う事を聞きません！

どうしたらいいの先生！？

ってな状況です

安定しねぇです　はい

話もそろそろ動きますだしますので

どうぞ次も見てやって下さい

それでは！！

5『キャラ作りには一切の妥協も許されない』（前書き）

5話目　投稿します！

コメディって難しいです・・・

これから精進しようと思いますので

応援して下さるとすごく嬉しいです！

それではどうぞ！！

5『キャラ作りには一切の妥協も許されない』

やぁ！　良い子の皆！

教えて☆お兄さん♪　の時間だよ！！

まずはこのコーナーの説明をするよ！

ここは最近良くあるような　皆からの質問にお兄さんが答えるなんてものじゃなく

お兄さんの質問に皆が答えるというシステムを採用した

反面教師系　超他力本願な全く新しいコーナーだよ♪

主にお兄さんの精神的安定に活用されるコーナーさ！

良い子の皆はお兄さんの精神（ココロ）を守る為に全力で答えるように！！

わかったかな？

悪口とか言われちゃうとお兄さんが天井に吊るしたロープを輪っかにして遊び始めちゃうから　皆　お兄さんには優しくしてね♪

それでは！！

皆に質問です！

ドウシテコウナッタ？

現在　俺　現実逃避中・・・

頭の中では　どこかで見たことあるような子供番組が　面白おかしく陽気に歌い始めているが

視線は鏡の中のメタルボディに釘付け

それも仕方ないと思う

日常　馴れ親しんだはずの　貧相とまではいかないまでも平均的なマイボディが　ちょっと見ない間に言葉では言い表せないくらい大変な事になっているのだから・・・

例えるならば・・・優しくていい子だった息子が　嫁さんと離婚して2年後くらいに会って見たら世紀末覇者みたいな不良になっていた

そんなカンジ・・・

あ　息子って別に下ネタじゃないよ？　あっちの息子じゃないから勘違いすんな

まぁ　アレだ・・・

とにかく洒落にならん

変わり果てたマイボディを前に俺が言葉を無くしていると

再び天井に格納されていく鏡

気の抜けたような　ズウィ～ン　という音が俺の心中とはなんともかけ離れた間抜けなものに聞こえる

が　それと同時に

放心していた俺も現実に引き戻される

「どうだ！　私が自ら設計＆改造をした新しい身体は！？　勿論まだ完成というわけではないが　私の自信作だ！！」

そして　現実逃避から復帰したばかりの俺の耳に届いたのは　やはり　白衣の少女の能天気ボイスだった

まるで子供が自慢をするかのような声だ

身体中から『ほめて　ほめて』みたいなオーラを出している

確かに普段の俺ならその子供ならではの愛らしい姿に　ついつい頭を撫でくりまわてしまっているところだったろう

しかし　今の俺はこの超絶能天気なお子様を校舎裏に呼び出したいイジメっ子の気分だ

覚悟するがいい　俺様の黄金の右が火を吹くぜ

体が動くようになったらね・・・

しょうがないから目で不満を訴え　口で不服を伝える事にする

「なんていうか　あんまり嬉しくないっていうか……（中略）……正直　迷惑なんだけど」

とりあえず　延々文句を言ってやった

（ちなみに秘書っぽい人は我関せずを貫いている）

すると　どうしたことだろうか？　さっきまでのマッドサイエンティストなノリから一変

五月蝿かった白衣の少女は急に大人しくなった

少しは反省してくれたのだろうか・・・

「……ぐすっ」

・・・ぐすっ？

「ぐすん……」

しまった！　やり過ぎた！　白衣の少女が涙目になっとる・・・

な　泣くのか！？　マズイ！　子供のあやしかたがわからん！！

「うぅ……でもでも　あのままだったらどーせ死んじゃってたわけだし　だから　そんなに睨まなくても……」

あれぇぇえ！？　キャラ変わり過ぎだろ！？　さっきまでの能天気ガールは！？　そっちが素なの！？

「……ぐすっ……ふぇぇ～」

白衣の少女が言い訳をしながら半ベソをかき始める

涙腺から滲み出た涙が零れるまで　秒読み状態だ

3

2

い「わ　わかったから！　わかりましたから！！　ちょっ！？　泣くのは勘弁して！　謝りますから！！」

俺は悪くないが　全力で謝る

さすがに女の子を泣かせてまで許さない程　鬼じゃないです

・・・てゆーか

女の子を泣かすという行為に腰が退けてしまう小心者なだけですけど

「こ　今度から気をつけてね？」

出来るだけ優しく声を掛ける
まだ涙目ではあるが持ち直したようだ

しかし　さすがに先ほどまでの元気は白衣の少女には無い

完全に落ち込んでしまったようだ・・・

その姿に擬音を付けるとすれば　しょぼーん　が一番合っているだろうか

・・・とにかく　やっと落ち着いたというわけだ

はぁ　泣きたいのは俺の方なのに・・・

しょぼーん・・・

喉元過ぎれば熱さ忘れるという諺の通り

熱さを忘れた白衣の少女が　メタルボディについての自慢兼説明を元気に始めた頃

俺は足り無い頭をフル回転させて　元に戻る方法を考えていた

ひととおり冷静に考えた結果　ひとつの仮説を思いついた

「もとに戻すこととか出来ないのか？」

改造できるならその逆はどうなのか？　ってことだ

少なくとも　俺の知る限り人体改造　それもフル改造なんて　世界最先端の技術でも出来るかどうかってところだ

つまり　それだけの事をやってのける連中なのだから　逆に元の体に戻す事も出来るはずなのだ

多分・・・

「え～カッコイイのに～

『出来るよね？』　イエスッサー！！」

このアホの子はさっきまでの出来事を　全て忘れてしまったようだ

だから（鬼のような）笑顔の（ドスの利いた）優しい声で　もう一度尋ねると　軍隊式のとても良い返事が返ってきた

別に怒ってません　ちょっとイラッとしただけなんです

・・・だから　そんなに青ざめた顔でガタガタ震えるんじゃない

傷つくじゃないか・・・

後に　和解した白衣の少女から聞いた話だが　俺自身に睨んでいるつもりが無くても　俺の目はとても怖いらしい

鋭いとか眼力がある訳ではなく　例えるならば　深い闇に見初められているような感覚らしい・・・

ハハッ　厨二っ

・・・それはともかく　案外早く元の体に戻れそうだな

良かった　良かった

・・・

アレ　もう一人居たような気がするんだが

いつの間にか　秘書っぽい人は室内に居なくなっていた

もしかしたら　ここから見えない位置にいるのかもしれないが

そんな気配はしない

どこか行ったんだろうか？

5『キャラ作りには一切の妥協も許されない』（後書き）

・・・なんですかね？

キャラが本っ当に言うこと聞きません

好き勝手に動きます・・・

どんどんストーリーが変わっていく

そんなわけで次話投稿が遅くなることがなきにしもあらず・・・

とにかく　がんばります！！

ではでは！！

6『馬鹿は馬鹿なりに一生懸命馬鹿な人生歩んでるんです！　馬鹿にしないでください！』

６話目投稿します

前の話から日数が空いてしまいました

申し訳ないです・・・

こんな作品でも見てくださっている方がいるのかどうか分かりませんが

一段落するまでは終わりませんので　どうかお付き合い下さい！

不備がありましたらお申し付け下さい

ゆっくりまったりいきましょう

それでは６話目です！　どうぞ

6『馬鹿は馬鹿なりに一生懸命馬鹿な人生歩んでるんです！　馬鹿にしないでください！』

ガショーン　ガショーン

秘書っぽい人の姿が見えなくなって数分・・・

「おおっ！　ちゃんと歩けてる！　凄いなこれ！！」

ガショーン　ガショーン

俺は今　白衣の少女と良好な関係を築きつつある

ウィ～ン　ウィ～ン

「すごいでしょ～　えへへへへ

…は！？

ごほんごほんっ！！

なっ何を言う！　当然ではないかっ！！

はっはっはっ！！」

キャラ作りのボロを高笑いで誤魔化す白衣の少女

本名　梨理華・リル・メリー・リルリ・リリアーヌ・カリスと言

うらしい

最初に名前を聴いた時は　リがゲシュタルト崩壊を起こしました

ウィ～ン　ガチャン

良いとこのお嬢さんらしい白衣さんだが　話してみると　話の分かる素直な子だ

「仮面ライ○　゙ーというよりは○ーミーターってとこかな」

ちなみに　さっきからガシャガシャウィンウィンやってんのは機械の手足を付けた俺です

機巧義肢（オートメイル）っていうらしい・・・

本当に梨理華・リル・リル・リ　・・・リリル？　リラ？

白衣さんは厨二が好きだなー　ハッハッハ・・・

え？　失礼な　僕が名前を忘れるなんて最低な事するわけ無いじゃないか！

なら名前を言ってみろ？

・・・ワタシ　ニホンゴ　ワカリマセーン

ハッハッハッ！！

・・・

すみません　取り乱しました

ガシャーン　ガシャーン

・・・まぁそんなわけで　元に戻れるみたいだし　どうせなら今の状況を楽しむ方が良いかなと思いまして

それに　人生の中で改造人間になれるなんて体験　滅多に出来ないからね　多分

ガキョ～ン　ガキョ～ン

「くっくっくっ…　ターミネー〇ーか　勿論そんなものとはレベルが違うのだよ！

何故ならば！　その体には私の創り出した全く新しい形態のエネルギーコアを採用しているからだ！！

そもそもにして　従来のコアでは　アニメやマンガの様に人間型に固定した場合での　エネルギーの備蓄量や変換効率がかなり限られてしまう！

だがしかーし！！　それら二つの問題点を解決するため　画期的で天才的な方法を私は思いついたのだ！！」

自慢気に話す　白衣さんのこの口調はキャラ作りらしい　時々ボロが出る

どうでも良いが素のキャラと違い過ぎて不自然だ

だが　見かけによらずというか何と言うか　白衣さんはかなり頭が良さげだという事が分かった

「空間多元論を応用し作り上げた私の自信作　その名も『亜空間機巧（カオス・ポット）』だ！！

ふっふっふっ　『亜空間機巧』が何か知りたいだろう？

遠慮はするな！　顔に書いてあるぞ？

知りたいんだろうそうだろう！？

そこまで言うならば仕方ない教えてやろうではないか！！

まずはその原理からじっくり……」

このように　発言の節々にあるイタイ台詞と子供っぽい言葉づかいは気になるものの

まるで　このメタルボディを造ったのが自分であるかのような言い種といい

秘書っぽい人に『博士』と呼ばれていることといい

このメタルボディは十中八九白衣さんが造ったものだろう

少なくとも　白衣さんが俺よりは頭がよろしい事はよっく分かった

・・・何だよ？　俺だって大学くらい出たさ・・・　悔しくなんか無いんだからね！！

・・・なにはともあれ　思ったより早く元の体に戻れそうなのだ

過去は忘れてポジティブシンキング　今この時を全力で楽しもうと思います

「博士？　話は済みま……」

いつの間にか部屋から消えていた秘書っぽい人が　これまたいつ

の間にか部屋の中に現れた

「…何を　しているのですか？」

居ないと思っていた人間に死角から声をかけられれば　勿論
びびりな俺はそのスキルを余すこと無く発揮する事になる

具体的に言えば　そう　ちょうど目の前に居た白衣さんに抱きつ
いた形であった

・・・

落ち着け　誤解だ　話せば判るさ　まずは歩み寄る事が大切ですよ

「……」

秘書っぽい人のこめかみがヒクヒク動いてる・・・

ヤベェな不機嫌オーラなんて可愛らしいものじゃねぇ　今や殺意
の波動と化している

・・・　時が経つにつれて波動が大きく　あ・・・

そうですよね　分かりました　まずは　白衣さんから離れた方が
良いってことですね

秘書っぽい人を刺激しないよう　そっと離れる俺

しかし　そんな俺に突き刺さるのは　デスビームも真っ青ってくらい鋭い秘書っぽい人の視線・・・

とてつもない命の危険を感じる　いったいどうしたら良いんだ

！　そうだっ

白衣さんならこの誤解を解くことが出来るはず

白衣さん！　・・・あれ

「あわあわ／／／／」

目線で白衣さんに助けを求めるも　それどころじゃ無さそうだ

てゆうか・・・　キャラ崩壊しとる

「ちょっ！？　しっかりしてくれよ！？　頼むから！　頼みますから！　帰って来ーい！！　ちょっ！？　（ドス！）ぐぼぁ！！？」

・・・

・・・

後日　白衣さんから聴いた話だが
意識を無くす前に響いた鈍い音は　どうやら秘書っぽい人の踵落としが炸裂した音だったらしい

ちなみに秘書っぽい人の名前はレイリって言うらしい・・・
漢字で書くと冷李だ

まぁ　どうでも良いけど・・・

・・・とにかく　俺は意識を強制的に手放す事になった

あれ？　俺はいったい・・・

なんだ？　ここ何処だよ　何か最近この台詞多いな

あ　人だ

あの～すいません　ここ何処か分かりませんか？

『キャバクラ　メイドｉｎ冥土』？　なんだそりゃ

って　じいちゃん!?　・・・何で生きて　あぁ　俺が死んだのか・・・　だから冥土か・・・

センス無ぇ・・・

まぁ良いや　元気だった?　はおかしいのか?　なんて言えば良いんだ?

つか　何してんだよこんなところで・・・

さっきから何飲んでんの?　毒々しいくらい真っ黒なんだけど・・・

酒!?　あの世に酒なんてあんの!?　てゆーかそれ酒なの!?

・・・俺ももらって良い?

・・・あっ　美味しい・・・

そういえば　ばあちゃんと仲良くしてる?　ばあちゃんもこっちにいるんでしょ?　ケンカとかしてない?

え?　日常茶飯事?

なんでさ?　仲良くしなよ

・・・

あぁ　そりゃばあちゃんもキレるわ

ハハッ　このエロじじぃが

え？　何？　そろそろ時間？

なんでだよ？

もうちょっと良いじゃん・・・

わかったよ　わかったって　しつこいな・・・　もう帰るよ

じゃっ　またな　じいちゃん

また来るよぶぉあ！？

「あっ　気がついた！　えっえ～と……なっ何か幸せそうな顔だったけど…　夢でも見てたの？」

目を開くと白衣さんの心配しつつも何故か慌てた様な声が聞こえてきた

ちなみに冷李さん・・・　秘書っぽい人は白衣さんの後ろに控えてる

ヤベェよあの人・・・　声に出して無いのに名前呼んだ瞬間　例の波動を感じたぜ・・・

これからも秘書っぽい人でいこう

「？」

白衣さんが首をかしげている

「…ん？　あぁ　死んだ筈のじいちゃんとキャバクラで飲む夢を見たんだ

また来たいつったら百年早いってぶん殴られたけど」

生前から破天荒な年寄りだったからな

あの様子だと　ばあちゃんも苦労してんだろ

「…へ　へ～」

白衣さん　聞いといてその反応はおかし・・・

・・・何かおかしいぞ

白衣さんと目が合う度に反らされる

明らかに変だ

「白衣さん？」

「……サッ」

まるで子供が親に隠し事をするかのような反応だ

俺が寝てる間に何かしたのか？

「…ジ～　何か隠してない？」

ビクッ！

「そ　そそそそんなことは……」

急にアワアワし始める白衣さんが　後ろに控えてる秘書っぽい人に助けを求めるような視線を送る

それに対し　秘書っぽい人は小さく会釈した

秘書っぽい人は白衣さんの前まで歩いて来ると　俺の顔を見て

「……チッ」

舌打ちをしてきた・・・

理不尽過ぐる

「え　え～と……何ですか？」

理不尽な対応に納得は出来ないが　びびりな俺には何も言えない

結局は相手を刺激しないよう　下手に出てしまうヘタレ具合

果たして　俺が誰かに強気で挑める日は来るのか・・・

「…本来なら博士から伝えられる筈でしたが　今回は私から伝えましょう…」

白衣さんのアワアワの理由かな？

割かし重要そうな雰囲気じゃん

「…あなたの元の体に関係する重要な話です…」

それはかなり重要ですね！！

・・・何でしょうか？　何か深刻なカンジですね

ロクでもない気配がパねぇんですが

「……あなたの体は」　あ　ちょっと待って下さい

心の準備がまだ

「現状　すぐ元に戻すのは不可能となります……」

「…それはどういう？」

よろしくない方向に流れていく秘書っぽい人の話に思わず口を挟むが

それを無視して

秘書っぽい人が冷静に言葉を繋げていく

「既にあなたの体は処分済みですから」

パねぇロクデモネェ・・・

6『馬鹿は馬鹿なりに一生懸命馬鹿な人生歩んでるんです！　馬鹿にしないで〜

お帰りなさいませ〜

読んでくださってありがとうございます

やっと白衣さんと秘書っぽい人の名前を出せました　良かったです

梨理華・リル・メリー・リルリ・リリアーヌ・カリスさんと

冷李さんです

一応補足しておきます

作中　白衣さんの事を名前で呼べなかった主人公ですが　それにも訳があるのですよ

長くて覚えられなかったのもありますが　もうひとつ　主人公がびびりのヘタレだからです

名前で呼んで嫌な顔されるのを無意識の内に恐れたんです

秘書っぽい人には既に嫌な顔されてますが・・・

長々と書いてしまいました　すみません

それでは　まったりペースの更新ではありますが！　しっかり投稿を続けていきますので！

片手間にでも応援してください！

ではでは　またの機会に

7『・・・まだ物語は始まってさえ無い　信じられるか？　これ7話目なんだぜ

7話目です

すみません　だいぶ遅れました

いろいろと理由はありますが

もはや言い訳はいたしません！

開き直ります！！

後少しで現実の苦行から解放されますので　待ってて下さい！！

それでは第7話です　お粗末な出来ですが・・・

スナック感覚でどうぞ！！

7『・・・まだ物語は始まってさえ無い　信じられるか？　これ7話目なんだぜ

秘書っぽい人によって明かされた衝撃の（ロクデモネェ）事実は

俺の希望を一瞬で八つ裂きバラバラ木っ端微塵にしても飽きたらず

勢い余って俺の中のナニかをブチッと切った

・・・そのナニかってのは堪忍袋の緒なわけで・・・

「　なんっっっじゃ　そりゃー！！？」

つまりぶちギレたわけで・・・

「話が違いません！？

ってか処分済み！？

あんたらヒトの体に何しちゃってんの！？？」

びびりな俺も怒る時は怒るんです

もうね　プンプンですよ

・・・うぇ

「本日　午後４時に焼却炉にて焼却処分を終え…」

・・・自らの思考に吐き気をもよおすほど怒っている俺だが

全く動じずに報告を始める秘書っぽい人

この人の中で俺は『ヒト』でさえないのかもしれない

悲しい！

「　ちげーよ！？

処分の方法は聞いてねーよ！？

確かに何しちゃってんのとは言ったけどね！！？

っていうか何！？　人の体燃やしたの！？　ホント何してんだあんたら！？」

「……チッ」

「今舌打ちが聞こえたよ！？

おかしいなぁ！

ぜんっぜん反省の色が見えねぇなあんた！？」

俺の体を燃やしておきながら全く悪びれない態度の秘書っぽい人・・・いや悪魔

ちなみに白衣さんは

「お　落ち着きたまえ！　二人とも　大丈夫だから！！　まずは話を聞きたまえ！！」

何とか俺を落ち着かせようと必死だが

ふんっ

何が落ち着きたまえだ

何が大丈夫だからだ

白衣さん　元に戻れるって俺に嘘ついてたな

「だから話を聞きたまえと！」

俺はもう誰も信じない　永遠に人間不信だ

「だから話を…」

人間不信に陥った俺は彼女達から離れ　部屋の隅っこで膝を抱え始める

白衣さんが何か言ってるが知らん　俺はもう誰も信じないのだ

誰も信じない　誰も信じない　誰も信じない　誰も信じない　信じない　信じない　信じない　信じない　信じない　信じな・・・

「聞いてよ！！」

ドッ！

「ぐぼぉへぅ！？」

信じないスパイラルに陥っていた俺に

どこから出したか分からない鈍器を叩き込む白衣さん

薄々分かってはいたが

頭だけはほとんど生身らしい

痛みに悶絶し声にならない悲鳴のようなものを上げる俺

頭が割れたんじゃね？　ってくらいクリティカルヒットだった

「△☆○×！！？？」

「ああ！？　やり過ぎた！！」

「博士　さすがです」

部屋中をのたうち回る俺を見てそれぞれ一言

白衣さん　確かにやり過ぎです

・・・悪魔に関しては若干笑ってんのが見えたとだけ言っておく

「〜〜〜！！」

痛みに頭を抱えながら白衣さんに無言の抗議

「話を聞かないから……」

・・・どうやらここでは　話を聞かないと鈍器で殴られるらしい

近隣の中学校にでも導入すれば話を聞かない生徒は激減すること間違いなし

実質的な生徒の数も減ること間違いなしだが・・・

「じゃあ　説明をはじめるよ！」

・・・場の空気がある程度治まった頃に　白衣さんが声を上げる

クリティカルヒットの痛みは未だに治まらない

「？　何の？」

何の説明か分からないので聞き返す

すると

「貴方の肉体を取り戻す方法についてです」

まるで当然のことを言うように応える悪魔

だけど　その内容は俺にとっての新たな希望だった

「方法あんの！？」

当然食いつく俺

「あるよ！」

それに元気良く応える白衣さん

「不可能とか言ってなかったっけ？　……焼却処分したんでしょ？　たしか」

「“すぐには”という意味です

完全に肉体を処分してしまった以上　新しく造るにはそれなりの予算と時間が必要ですから」

「新しく…造る？」

聞き返す

「……説明しても理解出来ると思えませんが…」

「……」

失敬な・・・

どうもこの悪魔はいちいち俺を馬鹿にしないと気がすまないみたいだ

俺だって大学くらい出てんだからな

・・・まぁ　難しい話はちょっとだけ苦手だけど

ほんのちょっとね・・・

「私が説明しよう！！」

・・・はい

という訳でね　白衣さんに説明されましたよ

頭の弱い生徒（俺）のためのサルでもわかる優しい説明だったんで　その生徒（俺）にも何とか理解することが出来ましたよ

・・・なんかね　取り乱したりした自分が恥ずかしくなりましたね

はい・・・

でも　さすがにね　体をウェルダン通り越して消し炭にされたらね

しょうがない反応だとは思いますよ？　人間としては

今は　改造人間ですが

では白衣さんから受けた説明を説明いたしましょう

最初　白衣さんはヒトゲノムがどうとか　もはや日本語かどうかさえ分からない言葉を使っていたが

とりあえず　簡単に言えば

新しい身体を造ることは案外簡単らしいです　ええ

なんか　髪の毛一本から細胞取り出して培養すると　俺のクローンがどうたらこうたらとか言ってたけど

良くわかんね

まぁ　何とかなるってことはわかった

ただ　今はその為の資金が無いんだとか

どうすんねーん

とか言ったら殺される気がしたんで黙ってたら

「資金が無くなったのはあなたを改造したせいですから　勿論協力してくださいますよね」

というのは悪魔・・・もとい秘書っぽい人の弁だ

・・・いろいろ言いたい事はある

勝手にあんたらがやったんじゃね？　とか

恐いから言わないけどね

「…はぁ…　分かりましたよ　それで？　俺に何させる気ですか？

このメタルボディじゃ　ろくにコンビニでバイトも出来ないですよ

それともヒーローショーの敵役ですか？

マスクさえ着ければ衣装要らないし…」

「ふっふっふっ　ヒーローショーの敵役か？　考え方がセコい！
だが発想は悪くないぞ
その体を持ってすれば作り物のヒーローショーなど目じゃない
本物のヒーローになることも夢ではないのだからな！！」
へ～　そうなんだ～
また白衣さんの悪い病気だろう　こういう時は流すに限るな
・・・厨二もここまで悪化すると大変だ
まぁ　良いけど・・・
「それで実際のところ仕事とやらは何なんですか？」
白衣さんがｈａ！　ｈａ！　ｈａ～！　とアメリカンな高笑いをしてる内に話を進める事にする
「はい…貴方に手伝って頂く仕事は　簡単に言えば世界平和の為の活動です……」
「世界平和？」
秘書っぽい人の漠然とした説明に思わず聞き返すが・・・

なぜだろう・・・

普通なら世界平和ほど平和的な響きのある言葉は無いはずなのに
何故か嫌な予感がするのは

なぜだろう・・・

この人の言動に　一々ロクでもない気配が漂うのは・・・

「世界平和という崇高使命を持った我々によって世界を統治する
……」

その答えは秘書っぽい人の次の言葉ではっきりすることになった・
・・

「所謂

世界征服です」

・・・ぱーどぅん？

7『・・・まだ物語は始まってさえ無い　信じられるか？　これ7話目なんだぜ

お帰りなさいませ！

今回はご覧のようにキャラ崩壊が激しい回となっております・・・

そうです・・・

物語を強引にでも進めていこうとした結果です・・・

何かもうホントすみません！！

これからも精進しますので　お心の広い方々はまた見てやって下さい！！

ではでは！！

8『シリアスムードにゲッソリ』（前書き）

８話目です

すみません　とても遅れました

そのわりに内容に自信は・・・

とにかく見てやって下さい！！

それでは８話目です　どうぞ！

8『シリアスムードにゲッソリ』

「世界征服です」

・・・

「…はぇ？」

どうも　俺です

すみません　へんな声が出ました

でも　それは仕方ない事だと思います

だって　秘書っぽい人の言葉は予想の斜め上から消える魔球を投げ込んだのに　完璧なタイミングで打ち返されたくらい　逆に予想外だったのだから・・・

だって世界征服だぜ？　世界征服

そんなん　変な声くらい出るだろ？

『はぇ？』や『ふぇ？』の1つや2つくらい出るさ

世界征服なんだもの・・・

みつお

・・・まぁ　とにかくだ秘書っぽい人の言った言葉は俺には全く理解できなかった　というより冗談にしか思えなかった

だから俺は呆けたように何のアクションもとれなかった

しかし　そこは秘書っぽい人　そんな俺の様子を見ても　構わず話を続ける

「我々は　最終目標に世界平和を掲げています　しかし　その為には皆の中心に立ち　世界をリードする正しき指導者の存在は不可欠です」

一呼吸置いて　更に続ける

「我々が目指すのは　その指導者というポジションに立ち　世界から戦争などという大きな悲しみを無くす事です」

まるで新手の宗教のような言い回しだが　印象としてはテロリストに近い

さらに秘書っぽい人は　世界征服の必要性やらなんやら　何かと物騒きわまりない話を延々と熱く語り始める

曰く

『……良いですか？　世界には我々以外にも世界征服をもくろむ不埒者がいて……』

・・・

『……世界には未だに多くの問題が残っています　それは何故か？　国のトップ……つまり　政府が腐りきっているからです！　だからこそ指導者として我々が……』

・・・

『……今！　世界は求めているのです……！　正しき指導者を！　誇り有る革命者を！　強き英雄を！　ならば今こそ我々が立つべきなのです！！　我々の戦う意味は……』

・・・

・・・終わらない

秘書っぽい人が熱い語りを始めてから　そこそこ時間が経ってる気もするが　いい加減長いです

高校時代の朝礼で校長からの無駄に長い演説を聞かされてる気分だ

興味ない話ほど長く感じるんだよね

とまぁ　秘書っぽい人の話を右から左に聞き流しながらいろいろと考えてみる

世界征服には　秘書っぽい人が熱くなる何かがあるらしい

仕方がないので秘書っぽい人の隣で暇そうにしてる白衣さんに簡潔な説明を求める

「つまり　我々の目的の為に世界征服をするから協力したまえという事だよ」

まぁ　簡潔だけども

そんなこと出来る訳無いでしょうよ

実現不可能に決まってるじゃまいか　まったく

「ここのテクノロジーを使えば簡単だと思わないかい？」

「……てくのろじー？」

「科学技術の事だよ？」

「あぁ　なるほど…　って　いやバカっ　そのくらい分かってるから　科学技術でしょ？　科学技術　あれでしょ？　テクが科学でノロジーが技術っていうあれっぽいやつだよね？　最初から分かってたよ　ははは……」

「…そこから分かってなかったんだ？」

白衣さんにため息をつかれた

「あ～もう！　そうじゃなくて　そのご自慢のテク…テク…テクニシャン？　「テクノロジーの事？」そうそれ！　それはいったいどの程度なのかってところを聞きたいだけだからっ」

これ以上　頭のレベルが露呈しないように話を変える　手遅れな気もするけど

「……」

無言で指差す白衣さん　その先には　・・・俺？

「……サッ」

自分の背後を振り返ってみる　しかし　それっぽい物はないように見える

ということは・・・

「まさか！　……ステルス迷彩だとでも「違うよ」……えっ」

・・・違うようだ

「何でちょっと残念そうなのか分からないけど　私が指さしてるのは“それ”だよ」

白衣さんの視線と指の先には　やっぱり・・・

「って　俺やないかーい」

某髭男爵のノリ　まだたまに見るよね

「白衣さん？　俺にはそのエクスタシー「テクノロジー」それなんて無い……」

途中まで言って気づいた

「俺　今ロクデナシー「テクノロジー」の塊じゃん」

ロクでもねぇ

完全に忘れてたわ

「そう　その体は私達が持つテクノロジーのすいを結集した最高傑作なのだよ！！　その性能の高さは君が一番分かっているはずだよ！」

白衣さんのテンションが上がり始めた

手をグーパーしてみる

・・・確かに全くと言っていいほど違和感が無い　それどころか触った感覚や温度まで感じるし　世間一般に知られてるようなスパイシー「テクノロジー」とは性能が違うようだ

「テクノロジーって言い過ぎてゲシュタルト崩壊し出したよ」

っていうか今心の声を読まれた気が「気のせいだよ」　そうか気のせいか

「……そのエクトプラズマー「テクノロジーだよ！　原形の面影がないよ！？　まさか　わざと！？」それが凄いってのは分かった」

そろそろ話を進めよう

「絶対わざとだよね！？」

白衣さんが何やら叫んでいる　何かあったのだろうか

「でもさ　それだけで世界征服なんて出来なくない？　もっとこう　政治的なものとかあるわけじゃん？」

我ながらナイスな質問をしたと思う

「……テクノロジーもまともに憶えられない君の口から政治的なんて言葉が出るなんて驚きだよ　……やっぱり　わざとだったのかな……」

「わざと？　えっ　なにが？」

あれ？　何か怒ってる？

「……はぁ　もういいよ　君の疑問に答えておこう　しかし　その為には確認をとっておく必要があるのだよ」

「えっ？　何？」

さっきまでの白衣さんと雰囲気がガラッと変わった　なんて言うか　シリアスムードみたいな？

「……先にそんな体にしておいてこんなことを言うのもおかしな話なんだけど」

「え～と　どしたの？　いきなり改まって」

「……君は　私達の仲間になりたい……？」

突然　白衣さんの口調が暗い影をおびたような印象を与えるものにかわる

表情は無いがどことなく辛そうだ

「……これから先の話は私達の組織にとって正に肝とも言うべき

ものなのだよ……　今までの話もそうだが　あまり部外者に話して良いものでも無いんだよ」

つまり　こっから先は仲間にしか話せないって事か

っていうか　何をそんなにシリアスっぽい感じになってるんだろう？

白衣さんは　今までのイメージが崩れるくらい真面目に喋ってる

キャラ作りしていた時の白衣さんとも　素の白衣さんとも違う

「私がこれから君に求める答えがとても卑怯だという事は分かってるよ　選択肢なんて無いってことも　だけど　選んで欲しい　後悔をしないように……」

強い責任感をその目に宿した白衣さんが其処には居た

「……」

なんだろう　辛そうだ

「私達の仲間になれば　いつかは体を取り戻すことも出来るだろう……　しかし　断るというのなら　その体は返してもらう　……つまり　心苦しいが君には死んでもらうことになるのだよ」

だが断る

あぁ　いやごめん嘘　ふざける気は無かった

どうも俺は　シリアスっぽい場面が極端に嫌いだからつい・・・

「白衣さん　ごめん　話が唐突過ぎてついていけなかったりします」

「……私達は　言うなれば“悪の秘密結社”だよ　……聞こえの良い理想なんて掲げてるけど　結局は今の平和を乱す“ただの悪者”に過ぎない……」

白衣さんが異様に低いトーンで話し出した

「冷李君の言葉を借りるなら　研究に都合が良かったから拾っただけの君は　正直……　もう用済みなんだ」

さらに　白衣さんは続ける

「……だから最後に　仲間として世界征服に手を貸すか　……ここで　死ぬかを選んで欲しい……」

白衣さん　最後は言い切る前に俯いてしまった

「あ～　とりあえず　俺がその問いに答える前に　一つ質問に答

えて欲しいんだ」

「……なにかな？」

相変わらず暗い声の白衣さん　俯いたまま反応する

何か恐いんだけど

「ひゃくいしゃん…　白衣さんは何で俺を助けたの？」

白衣さんの暗い雰囲気に圧されて若干噛んでしまった

「……」

無言の白衣さん

「さっき秘書っぽい人が　『資金が無くなった』って言ってたの思い出したんだ……　そんなに余裕の無い状態だったのに　俺みたいなただの人間を助けたのはどういう事なのか気になっちゃってさ」

白衣さんの反応を伺う様に話しかける

「……どうしても必要な研究があって「資金を全部使ってまで？」……っ」

台詞の途中で割り込む　白衣さんが嘘を言ってると思ったからだ

「多分だけど　必要な研究ってのは嘘だよね？だって　こんなに凄い物が作れるなら侵略兵器なんて完全なロボットを造った方が良いはずだもん　例えば　ガ〇ダムみたいなね？　なのに人間としての自我を持った改造人間なんて造る必要が無い」

白衣さんの表情が泣き出しそうに少しずつ歪んでいく

……いや　イジメてるわけではけして……

でも　必要以上に悪ぶってる白衣さんの態度が気になる

「っ……そんなの気まぐれだよ！　そんなことより！　私の質問に答えてよ！？」

声を張り上げる白衣さん　顔は下を向いたままだ

「仲間になるか！　死ぬか！早く選んで！」

白衣さんの　フー　フー　という肩で息をする音がやたら大きく聞こえる

「俺は」

答えは既に決まってる

「仲間になるよ」

これしかない

「本当に良いんですか？」

いつの間にか演説を終わらせていた秘書っぽい人が聞いてくる

「当たり前ですよ　……白衣さんは俺を助けただけなんだから」

今　俺の（都合の良い）頭の中にはこんなストーリーが（都合良く）広がっている

ある日　世界平和という大望をもって世界征服を目論む白衣さんの前に　事故にあって瀕死の俺が現れた

傷は深く現代の医療技術ではとても治せない

正義感の強い白衣さんは瀕死の俺を助ける為に　秘書っぽい人とコツコツと貯めていた侵略資金を全てつぎ込んでしまった

必死の処置のおかげで俺はどうにかこうにか生きる希望を得るものの　改造人間という微妙な宿命を背負ってしまうことになったわけだ

「そして　白衣さんはいろんな責任を感じた結果　俺にせめてもの選択の自由をくれたんでしょ？」

全部都合の良い俺の頭が作り出した妄想　でもその妄想は全部が全部間違ってる訳では無いだろう

なぜかそんな不思議な確信がある

「っ……そ　んなこ　と　ない」

それでも否定する白衣さん

自分のやった事が自己満足でしかないからこそ　それが分かっているからこそ　白衣さんは　責任を感じて“悪役”を演じた“能天気なマッドサイエンティスト”を演じた

そういう事だろう

「だって　わ　たしは　き　君を……」

しゃくり上げる声のせいで　下向いてても白衣さんが泣いてるのが分かる

「ありがとう白衣さん　もう強がる必要は無いよ？　俺を助けてくれたんだから　白衣さんに責任は無いよ」

中腰になって白衣さんと目線を合わせる　白衣さんがゆっくりと顔を上げ　その顔が見えるようになる

やっぱり泣いてた

「白衣さんに悪役は向いてないよ　優しいもん　白衣さんは」

そういいながら　白衣さんの肩に力は入れないようにそっと手を添えて　笑いかける

女の子の涙は苦手なのだ　早く泣き止んで欲しいという願いを込めての笑顔だったのだが

「うぅ……えぐっ……ふぅえぇえええん！！」

予想に反してマジ泣きし出す白衣さん

緊張の糸が切れたとでも言うように　余計に大泣きを始めてしまった

「……これは　予想外」

何とか泣き止んでもらおうと試みるものの効果無し

オロオロする俺

「秘書っぽい人　ヘルプ！！」

「……誰が秘書っぽい人ですか」

秘書っぽい人に助けを求めるが　助ける気がない

クソッ　孤立無援か！

「あわわわっ……　頼むから泣き止んでくれよ～　白衣さ～ん（泣）」

超オロオロする俺であった・・・

「グスッ……ヒック……」

やっと白衣さんが泣き止み始めた（？）頃

「お…　落ち着いたでゲソか……白衣さん」

今の俺に言葉を当てはめるならゲッソリがぴったりでゲソ

変顔　物真似　だじゃれ　一発芸　エロ詩吟　自虐　物ボケｅｔｃ…

白衣さんを泣き止ませる手段を粗方試したでゲソ

語尾がおかしくなるくらいには頑張ったでゲソ・・・

・・・すみません　戻します

この体に体力という概念があるのか知らんが　少なくとも精神的なナニかがすり減った気はする・・・

とてつもなく疲れた・・・

「……うん　もう大丈夫だよ　ズズッ」

鼻水を吸い込みながらこちらを窺う白衣さん　涙で赤くなった目が痛々しい

「そう……　良かった　……本当に良かったでゲッソリ……」

あぁ　進化してしまった・・・

8『シリアスムードにゲッソリ』（後書き）

お帰りなさい

今回はいろいろ試行錯誤していたら何故か長くなってしまいましたが・・・

どうでした？

話を進める為に頑張ったらこんなカンジになってしまいました

コメディよりシリアスの方が書きやすい気がする

感想とかいただけると嬉しいのですが

あと　誤字脱字の報告もして下さると助かります

まったりのんびり投稿ですがしっかり続けるつもりです！！

次回に会いましょう！

ではでは！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5669x/

秘密結社の日常的侵略行為

2011年11月24日21時46分発行